

「百人の一步②～福岡県東峰村～」

校長 江口 満



10月7日(土)最初の目的地大分県日田市小野地区小鹿田焼の里を出発した生徒会は、小野地区に通じる県道沿いの被災現場を視察した。川から溢れた濁流が県道のアスファルトを波立たせた現場の様子を、日田市観光協会Mさんから説明を受ける。

主催する東日本の被災地支援団体を通じて、小、中学校の避難所や津波で被災した図書館と連絡が取ることができた。当時、子どもたちが読む絵本、児童書や本が必要であることを知り、生徒会と東日本大震災支援活動「人生一冊プロジェクト」を立ち上げた。自分が大切にしている「人生一冊」を被災地に直接届ける。私の心の時間が、ゆっくりと動き出した。

生徒会とPTAが協力して行った「人生一冊プロジェクト」は4年間続け、集まった書籍をトラックに積み、直接先生方と被災地へ運んだ。2014年(平成26年)8月、トラックで人生一冊を運んだ4回目、最後の年である。私は、宮城県女川町立女川中学校を訪問した。その中学校の震災資料室で一つの句に出逢い、目がはなせられなくなった。

「今思う もっと一緒に いたかった」

そして私は、当時の女川中学校A校長から一冊の本「女川一中生の句 あの日から (小野智美 編)」を託された。

【次号に続く】



【前号からの続き】私は、13年前の2011年(平成23年)3月11日(金)のことを今でも鮮明に思い出す。あの日の午前中は、北九州市内の全中学校で卒業式が行われた。そして卒業式の感動がまださめやらぬ午後3時過ぎ、ふと私は校長室のテレビにスイッチをいれた。上空のヘリコプターからの映像が映し出された。私は、職員室に駆け込み、叫んだ。

最初、いったい何が起きているのか分からなかった。解説者の悲痛な声が聞こえた。世界観測史上最大級のマグニチュード9.0の東北地方太平洋沖地震が発生し、東日本の海岸線に大津波が押し寄せてきていた。あまりにも、苦しく、悲しい映像。あの時も私の心の時間は止まった。

翌4月、異動先の中学校に着任。しかし私は3月のあの日から、「今の自分に何ができるのか」という自問自答の日々が続き、支援の第一歩を踏み出せない自分がいた。

しかし、考えても、考えても、支援の方向性が決まらない。そんなある日。一枚の新聞記事に出会った。避難所で絵本や児童書を分かち合うように読む女の子の写真。私たちは知った。被災地の学校や図書館が津波の被害に遭い、すべての本が流されてしまったということ。避難所生活をしている子どもたちが「本が読みたい。」という思いを。その新聞記事が、原点だった。私は、以前、学校に講演していただいた方が主



2017年(平成29年)九州北部豪雨で土砂崩れが起きた現場。他の現場から大型トラック15,600台が78,000㎡の盛土を行っていたが、7月の大雨で再度被災した斜面の様子を伺う。



【左】2017年(平成29年)九州北部豪雨で小野川は氾濫。約16億円かけて復旧工事が行われ、その際、新たに整備されたのが「小野川スリット」。くし状に鉄の棒を置くことで流木をせき止める。今回の大雨では大量の流木が引っかかっていて、下流に流れ込むのを防ぎ、住宅などへの浸水を防いだ。

【右上】10月7日(土)11時、Mさんから「小野川スリット」の話を伺い、お礼を述べ一路、福岡県東峰村へ向かった。

「大きな一歩」

3年3組 生徒会環境委員長 Kさん

激しい雨音で目が覚めて窓の外を眺めたら、辺り一面が濁流に飲み込まれて、見覚えのある看板や大きな木が流れてくる。そんな光景が想像できるだろうか。

東峰村は、九州北部豪雨から6年、再び豪雨に襲われて甚大な被害を受けた。せっかく復興も大詰めに見えかけていたところ、また振り出しに戻されたのだ。もし私が村長だったら、この苦痛



【上・左】東峰村村長に直接義援金をお渡しし、ご挨拶をいただく。

「平成29年九州北部豪雨では、7月5日の昼から夜にかけて740mmほどの豪雨に襲われ甚大な被害を受けた。その後河川の改良復旧工事をしたおかげで、今年の大雨ではある程度被害を抑えることができた。また防災のため線状降水帯予測システムを開発した。」



【上】東峰村防災管理官からは、7月の大雨の話を伺う。「平成29年の工事復旧が終わりかけた時に今年の災害が発生。今年の大雨は、1週間の雨量1000mmの後、7月10日、9時間で450mmの雨により土砂崩れや道路の損壊、土石流による家屋や工場・お店の倒壊などが発生。現在復旧活動に全力で取り組んでいます。」【下】質問する生徒会



「この目で見た本物」2年2組 生徒会環境副委員長 Tさん

初めての被災地への訪問。現地に着くまで実感が湧かなかった。だが被災した地区に入りバスの窓から見ると、生々しい状況があった。私は今回訪問した被災地のひとつ福岡県東峰村は、小石原焼で有名である。焼き物のお土産を買うために、私と家族がよく吸い込まれるように立ち寄ってしまう観光地だ。そんな魅力あふれる東峰村が被災した。私たちが訪れた「つづみの里直売所」でも崖がえぐれ、建物に木が倒れてきていた。かろうじて支えられていた一本の木も、建物がなければ道路まで届いていたと思うととても恐ろしい。

被災地を訪問して学んだことは、災害の怖さや被災した方々の悲痛な叫びだけではなく、復興に向け行動する人々を見て、もし自分の地域が被災した時、これから来るかもしれない大きな災害に直面した時、少しでもボランティアの活動を行い、手助けする大切さを感じた。またその気持ちが未来を創ることを知った。

【右】東峰村伝承館とお別れした生徒会は、JA筑前あさくら宝珠山支店を訪問し、被災地特産品パズーで販売する「宝珠山夢つくし」を直接購入し、バスに詰め込みました。



10月7日(土)12時東峰村伝承館到着。PTA会長Hさんの挨拶。

東峰村では次来たる豪雨に備え高精度の雨レーダー開発や大量の水にも耐えられる川づくりなどを進めているようだった。私たちは、この現状を知った以上、黙って見ている訳にはいかない。いつ再び豪雨が牙を剥くか分からないのだ。支援は一人で百進めるのではない。十人で、百人で少しずつ力を出し合い大きな一歩とするのだ。被害を激減させるために、少しでもかわる姿勢が私たちに求められている。

「日本で一番美しい村をもう一度」

3年4組 生徒会保健委員長 Oさん

私は、自分の担当場所である福岡県朝倉郡東峰村のことを、前もって知識をつけておこうとインターネットを使って調べてみた。すると一番上に「日本で最も美しい村」と書かれていた。だからどのくらい美しいのだろうと胸を弾ませていた。だが東峰村は着いてみると、土砂崩れなどが多く見られた。被災された方々は、どれだけ苦しかったことだろう。

被災された方によると、「土石流、濁流により国道の道路が見えず、川のようなだった。」という声も聞いた。また被災された方々は、早く元の「日本で最も美しい村」と言われる景観に戻そうといった前向きな姿勢で、今日も復興に向けての取組を行っているようだ。

私は東峰村へ実際に行ってみて、今後も自分たちができる復興支援を行っていくことで、東峰村の魅力が戻り、次の世代へと渡す鍵になるということが分かった。日本のよさを失わない、元通りにしていくためにも自分ができることは自分で、そして他人に手を差し伸べられるようになっていきたい。

「東峰村を訪れて学んだこと」

2年4組 生徒会書記 Yさん

私は今回の「第5回さくすくプロジェクト」で初めて被災地を訪れた。私たち生徒会執行部は、三か所の被災地を訪問したが、その中でも私が最も印象に残っているのが福岡県東峰村である。東峰村ではまず東峰村伝承館を訪問し、災害当時の話を聞いた。東峰村の方々は、7月の大雨で二回も災害に見舞われた。平成29年の豪雨で被災後、復興作業が行われ元に戻りかけていたときにまた被災したのだ。当時の被災状況や復興の様子などを映像で分かりやすく教えてください、私は災害の怖さを身近に感じた。

私が今回の被災地視察に参加して考えたことは、則松中の生徒の皆さんにも被災の状況を理解してもらい、より多くの人に復興の支援をしてもらいたいということだ。私は昨年、あまりバザーにも興味がなく、生徒会執行部の話をよく聞いていなかった。だから今後、支援活動に関心を持つ生徒が一人でも多く増えるように、執行部が被災地で学んだことの資料を作り、生徒の皆さんに広げていきたい。

